

## 白アズキの品種と栽培法

## 第2報 播種期と播種密度

尾形武文・矢野雅彦・田中昇一(福岡県農業総合試験場)

Takefumi OGATA, Masahiko YANO and Shoichi TANAKA: Varieties of Siroazuki Bean (*Phaseolea radiatus* L. Var. *auvea* PRAIN) and Cultivation Methods

## 2. Seeding Time and Density

第1報では白アズキの優良な品種として、早生種で主茎が短く、まん化しにくい「茨城県在来種」と中生種で主茎はやや伸びやすいが収量は安定している「椎田在来種」を選定した。本報では、この2品種におけるa当たり収量18kg前後を目標とした適正な播種期や播種密度及びまん化防止対策について検討したので報告する。

## 1. 試験方法

試験I 播種期と播種密度に関する試験は、1984年～'87年の4か年行い、品種は椎田在来種と茨城県在来種を供した。播種期については6月中旬から7月下旬の間で、播種密度については条間を60cm、1株2本立として適切な株間を検討した。施肥量は第1報に準じた。

試験II まん化防止対策は、1985、'86年に椎田在来種を用い、7月19～24日播、条間60cm×株間15～20cmの1株2本立で栽培。処理は徒長始めに1株2～5本の摘芯と地上40～50cmの剪葉を行い、その効果を検討した。

## 2. 結果及び考察

1) 播種期と生育及び収量(第1表) 椎田在来種は播種期が7月20日の場合、開花期は9月2日であった。これより播種期を早めても開花期は早くならず、生育が過繁茂となり、収量の低下が見られた。播種期を7月20日より遅くすると、開花・成熟期が遅れ生育量も小さくなった。なお、7月25日播以降では密播したため、収量

は7月30日播までは安定して高かった。

茨城県在来種は、播種期が遅い場合、開花・成熟期が遅れ生育量も小さくなった。しかし、収量は7月10日播が低く、7月20～30日播で高かった。

よって、播種時期は、両品種とも7月20～30日ころが適当と思われる。

2) 播種密度と収量(第2表) 各播種期とも密播した方が主茎は伸び、倒伏程度は大きくなったが収量は多かった。条間60cmとした場合の株間は、主茎の伸びやすい椎田在来種が15～20cm、まん化しにくい茨城県在来種で10～15cmが適当と思われる。

3) まん化防止対策(第3表) 剪葉は、生育が抑制され収量及び品質が低下した。摘芯は労力がかかるが収量、品質が安定する。

以上、白アズキの安定栽培法を明かにしたが、需要先が限られるため導入の際、販路の確保が必要である。

第3表 まん化防止処理と生育及び収量

試験区	主茎長	倒伏程度	a 当たり子実重	品質
無 処 理	93cm	2.3	20.2kg	2.5
摘 芯	74	2.0	21.5	2.0
剪 葉	57	0.5	18.5	3.0

注) 倒伏程度は0(無)～5(甚)、品質は1(上の上)～9(下の下)とした。

第1表 播種時期と生育及び収量

品 種	播種時期		株 間	開花期		成熟期	主茎長	a 当たり子実重	試験年次
	月 日	cm		月 日	月 日				
椎田在来種	6.12	30	30～40	9.2	10.25	141	7.7	1984	
	7.10	25		9.2	10.25	79	10.9		
	7.20	15		9.2	10.28	83	17.4		
	7.30	15		9.9	11.2	62	16.2		
在茨城県	7.10	25	15～25	8.26	10.21	57	13.4	'87	
	7.20	15		9.1	10.24	56	17.0	'84, '85, '87	
	7.30	10		9.6	10.30	45	16.2	'87	

注) 数値は、各年次の7月19～21日播に対する比及び差の平均値からの推定値。

第2表 播種密度と収量

品種	試験年次	播種時期	株間	a 当たり子実重	品種	試験年次	播種時期	株間	a 当たり子実重
椎田在来種	1985年～'87	7月19日～25日	25cm	17.2kg	茨城県在来種	1985年	7月19日	25cm	12.3kg
			15	19.1				15	16.5
			25	21.7				20	18.7
	1986	7.24	20	23.3		1986, '87	7.21～24	15	20.0
			15	25.3				10	19.5